

つたのは通信

特定非営利活動法人 としま遺跡調査会

豊島区の文化財展 2007 発掘された中世の長崎



長崎神社周辺遺跡から出土した中世陶磁器



展示会場にてパンフレット（無料）を配布しております

～豊島区の文化財展 2007～

期間：平成 19 年 10 月 22 日（月）～ 11 月 2 日（金） 9：00～17：00

場所：豊島区役所本庁舎 1 階ロビー

今秋 10 月から都内で一斉に始まった東京文化財ウィークにあわせ、豊島区でも「豊島区の文化財展 2007」（2007 年 10 月 22 日～ 11 月 2 日）を開催致します。場所は豊島区役所本庁舎 1 階ロビーにて。この企画展は、これまでの発掘調査で発見された貴重な遺跡と出土した遺物を、展示テーマに即して一堂に公開するものです。

NPO 法人としま遺跡調査会では、豊島区教育委員会からの委託を受け、この企画が始まった一昨年から 2 回にわたり、この展示を担当してき

ました。過去 2 回は、それぞれ「弥生時代の豊島区」（2005 年）、「掘り出された藤堂家染井屋敷」（2006 年）と、豊島区を代表する弥生時代、江戸時代の遺跡を紹介しました。今年は「発掘された中世の長崎」と銘打って、区内では珍しい、室町・戦国時代（中世）から江戸時代（近世）のはじめにかけての遺跡と、そこで発掘された貴重な遺物を公開します。

この時代の文化財が今も色濃く残る、長崎一丁目～西池袋四丁目一帯に位置する「長崎神社周辺

遺跡」が、今回の舞台となります。この遺跡とその周辺では、遺跡名に見られる「長崎神社」や「金剛院」といった、中世から近世にかけて成立した寺社が現存し、また中世に作られた供養塔である「板碑」が、区内で最も多く分布する地域として知られます。そもそも「長崎」という地名自体、その歴史は古く、16世紀中頃に書かれた古文書の中に、その名前が登場しています。その古文書『北条氏所領役帳』は、戦国大名である北条氏の家臣たちそれぞれの、役職と所領が記されているものですが、その中の一人「太田新六郎（康資）」の所領の中に「長崎」が含まれています。この太田新六郎こそは、かの江戸城の創建者として名高い太田道灌の子孫にあたります。彼の所領が、道灌の代から受け継がれたものであるならば、「長崎」村の成立は15世紀代までさかのぼる可能性があると言えるでしょう。

こうした古文書などの資料から、ある程度は中世の様子をうかがい知ることができます。しかし「長崎」に限らず、豊島区域の中世について書かれた古文書は少なく、その実態について、実はあまり分かっていないのが現状です。そうした不足した部分を補い、あるいは別の角度から地域の歴史へより肉迫する方法として、考古学による発掘調査が最も有効と言えるでしょう。

今回展示する資料は、2001年1月～2004年2月にかけて、山手通り拡幅工事に際して行なわれた発掘調査で発見された遺構と、その出土遺物です。この調査によって、中世の井戸や建物址などが発見され、陶磁器や漆椀など、当時の人々の生活が直に感じられる遺物が出土しました。この展示を通じて、戦国時代を逞しく生きた、名も無き人々の息吹を感じていただければ幸いです。

(宮川和也)

NPO 法人としま遺跡調査会が発足

「特定非営利活動法人（NPO法人）としま遺跡調査会」が2007年5月23日に発足しました。

埋蔵文化財の調査や研究、成果の公開、街づくりへの貢献などを行ない、行政のパートナーと位置づけられる団体として発足した本会は、1993年に豊島区教育委員会が設置した任意団体「豊島区遺跡調査会」が前身となっています。

主な業務としては、前身である豊島区遺跡調査会と同様に、区内の埋蔵文化財の発掘、調査報告書の編集を行なっています。

さらに、NPO法人となったことにより、市民・行政・企業との協働により地域文化の振興を図ることができるようになりました。今回の展示のように、豊島区教育委員会文化財係が主催する各事業に協力するほか、今後は小冊子や調査速報を発行したり、遺跡調査の作業体験会や勉強会を開催するなど、独自の活動も行なっていく予定です。

同時に、本会の趣旨に賛同してくださる賛助会員の募集も行っています。私たちと一緒に遺跡調査の楽しさ、文化財の大切さ、地域の歴史と文化を共に学んでみませんか。申込み方法など、詳しくはホームページをご覧ください。（小川祐司）



NPO 臨時総会の様子

～ ホームページができました！ ～

としま遺跡調査会では、多くの方に区内の遺跡と私たちの活動を知っていただくために、会報紙である「つたのは通信」のほかに、ホームページを設けました。ホームページでは、NPO設立趣旨や事業報告などのほか、豊島区の遺跡を紹介するコーナーや発掘ニュースなどを掲載しており、

「つたのは通信」のカラー版もPDFでご覧になれます。現在も新しいコーナーを企画しており、今後も内容を充実させていく予定ですので、ご期待ください。

ホームページ：<http://www.toshima-iseki.org/>
検索で「としま遺跡調査会」でもヒットします。

巢鴨遺跡(大坂屋ビル地区)の発掘調査を終えて

この夏(6月末から8月中旬)、「おばあちゃん
の原宿」で有名な巢鴨の地藏通り、つまり旧中山
道に面する巢鴨遺跡(大坂屋ビル地区)で、真性
寺境内から門前町にかけての発掘調査を大坂屋衣
料品店のご協力を得て行いました。

今年の梅雨は例年よりも出足が遅く長引いたこ
ともあり、調査開始から毎日のように小雨が降る
中の作業となりました。朝は晴れていても、午後
から雨が降り出すというパターンには苦労させら
れました。一方で梅雨が過ぎた7月中旬以降は記
録的な真夏日が続き、体力を奪われていくことに
…。しかし、連日多くの方が訪れ、熱心な質問を
頂いたり、またある時は真性寺に関する貴重な思
い出を聞くことができたおかげで大変充実した調
査となりました。

今回の発掘調査では、地藏通りより奥に延びる
範囲を調査できるとあって、今まで不明な部分が
多かった真性寺境内及び門前町を解明するための
発見が期待されていました。

現在の真性寺は、通りより少し奥まった場所に



発掘調査の様子

位置しています。しかし発掘調査により、江戸時
代初期(17世紀後半)までは境内が通りにまで
及んでいて今よりも広がったことが分かり、また
通りに面する境内の一部が次第に門前町として利
用されていく状況も明らかになりました。

その他では、境内と門前町を区切る溝、香炉や
寺紋瓦といった真性寺に関わる物を捨てたゴミ穴
など、真性寺に関連する遺構や門前町家の痕跡が
良好に残っており、真性寺及び巢鴨町の歴史を考
える上で貴重な成果が挙げられたといえます。

調査をしている中で、巢鴨に住む方や訪れる方
の中には、発掘調査やこの町の歴史に強い興味を
持つ方が大勢いらっしゃることを改めて感じまし
た。そういった熱心な方々や地域の皆様のため
に、発掘調査で発見された遺構・遺物を何とかお
見せできないかと考え、新しい試みとして発掘
調査の速報チラシを作ろうということになりました。

試行錯誤で作成した創刊号でしたが、配布初日
からすぐに無くなるという大好評振り!調査をし
ている一同の予想を超える嬉しいものでした。

調査が進むにつれ新しい発見が蓄積されたこと
や、創刊号を見た方々の強い要望もあって第2号
も作りました。創刊号と第2号を合わせた配布数
は、約1,500部にもなりました。

今後は、調査で分かったことやこれまでの周辺
の発掘調査の成果とを合わせて、各時代における
真性寺と門前町の土地利用の状況をより詳細に復
元していく予定です。

なお、今回の発掘調査の簡単な報告は、ホーム
ページのほか、巢鴨のタウン誌である『巢鴨百選』
10月号にも掲載されております。(高木翼郎)

～ 「つたのは通信」の由来 ～

この会報を「つたのは通信」とした由来につ
いて、少しお話しておきましょう。みなさんがご存
知のとおり、蔦は大きな樹ではありませんが、生
命力が非常に強い植物です。この蔦の葉が周囲の
樹木や建物につたい茂るように、多くの人に遺跡
の楽しさ、大切さを知ってもらいたいとの願いを
込めて会報の名としました。また蔦は、染井遺跡
を代表する大名屋敷である津藩藤堂家の家紋でも

あり、馴染み深い方もいらっしゃるでしょう。

創刊にあたり、「つたのは通信」の題字は湯澤
和子さんに書いていただきました。また、としま
遺跡調査会のロゴは山崎幸さんにデザインしてい
ただいたものです。豊島区の「豊」の字を意匠化
したもので、人が座って地面を掘っている姿をあ
らわしています。このほか多くの方々からご助力
いただきました。ありがとうございました。

氷川神社裏貝塚 (豊島区 No.1 遺跡)

豊島区には、現在 16 か所の遺跡が知られています。東京都内には、6,000 か所近い遺跡があるそうなので、数はひじょうに少ないといえます。その理由として、豊島区は早くから急速な都市化が進み、その中で重要な多くの遺跡が消えていったと想像されます。いま残されている遺跡は、こうした激しい開発の波を生き残った貴重な遺跡といえるでしょう。このコーナーでは、豊島区遺跡地図に登録されている遺跡たちを紹介していきます。

～日本考古学黎明期から注目された遺跡～

記念すべき第 1 回目は、池袋本町三丁目に遺された「氷川神社裏貝塚」を紹介します。東武東上線北池袋駅から 500 m ほど西にある氷川神社周辺が遺跡となっています。海から遠く離れた豊島区に貝塚があった、という意外な気もしますが、かつて大正年間にこの貝塚で縄文土器を採集していた地元の稲垣喜平・義松さん親子(故人)のお話によれば、シジミが特に多かったとのことで、主淡貝塚、つまり川や沼などに棲む貝が中心だったと考えられます。しかし、ハマグリやアサリといった、河口付近に生息する貝もみられたことから、縄文人の行動範囲はひじょうに広がったのでしょう。

ところで、モースによる大森貝塚の発掘調査(1877 年)をきっかけに日本考古学がはじまったのは有名ですが、まもなく、東京帝国大学(東京大学)の坪井正五郎を中心に、日本初の人類学会が設立されます(1884 年)。ここから今日の考古学が派生しますが、早くもこの翌年、人類学会に所属する白井光太郎が氷川神社裏貝塚で見事な土偶を発見し、一躍注目を浴びました。以来、明治時代の様々な研究者が調査

に訪れました。例えば、文京区弥生町ではじめて弥生土器を発見した有坂銘藏などもその一人です。このころの調査では、縄文土器や石器、特に石鏃(矢じり)がひじょうに多く見つかる遺跡として知られていました。さらに粗製の曲玉や丸玉なども発見されています。当時は「池袋村貝塚」とも呼ばれて、東京でも有名な遺跡の一つでした。これらの遺物は、今も東京大学や豊島区などに保管されています。

残念なことに、現在のところ貝がらの積もった貝層の正確な位置は不明です。関東大震災(1912 年)後の急速な宅地化の中で、貝塚としての面影は薄れてしまいました。しかし、最近の発掘調査でも、縄文時代中期～晩期(およそ 4000 ～ 3000 年前)の土器や石器が発見されます。ですから、貝塚の姿は失われても、貝塚を残した縄文人たちの住まい(竪穴住居)は、いまだ土の中に残されている可能性は高いといえるでしょう。近い将来、彼らの埋もれた集落が発見されるかも知れません。(宮川)

(参考文献：岡本 勇 1992「東京都池袋貝塚について」『武蔵野の考古学』吉田格先生古希記念論文集刊行会、豊島区 1981『豊島区史』通史編 1、白井光太郎 1886「貝塚より出でし土偶の考」『人類学会報告』2)



白井光太郎が発見した土偶(縄文時代後期)

【編集後記】

「NPO 法人化に伴い、会報を出そう!」と息巻いて、なんとか出ました創刊号。秋空を眺めつつ、紙面構成に頭をひねる今日この頃です。

(担当小川)

編集・発行

特定非営利活動法人
としま遺跡調査会

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨 3-8-9 巢鴨複合施設 201 号室

Tel・Fax 03-3915-6962

E-mail tics389@a.toshima.ne.jp

ホームページアドレス：<http://www.toshima-iseki.org/>